

ひがしゆり 東由利のしめ張り

- 1 種 別 無形民俗文化財
- 2 名 称 東由利のしめ張り
- 3 所 在 地 由利本荘市東由利
- 4 保 護 団 体 東由利のしめ張り保存協議会
- 5 説 明

東由利のしめ張りは、疫病や災厄の侵入を防ぐために、ワラを素材とした蛇や鬼の形を模したものなどを共同で作し、集落の境に掲げる行事である。

東由利地域は、秋田県の沿岸部と内陸部をつなぐ中継地であり、信仰の山である鳥海山と保呂羽山に接していることから、修験者によって伝わった様々な文化や風習などの一つにしめ張りの行事があった可能性が考えられる。この地域では、聞き取りにより少なくとも昭和の初めにはしめ張りが行われていたと確認できる。ただ、その開始時期については明らかではない。かつては10か所ほどの集落で行われていたと伝わるが、昭和の初めごろと同様の形態で、現在まで継続している地域は山間部の集落5か所である。葎沢集落では、以前は小正月に行っていたが、現在は2月3日に近い日曜日に行っている。当番を中心に地区の会館でワラ蛇を作り、神事の後に集落の境にある御嶽神社に奉納した後、すぐ近くに設置した支柱に横木を渡したものに巻き付ける。神事の際、桶に入れた水も祈祷を受け、火災除けの水としている。このことから時期的に初午行事との関連が大きいと考えられる。須郷集落では、以前は8月15日か16日に行っていたが、現在はお盆明けの日曜日に行っている。当番の作業小屋で全長約10mほどのワラ蛇2体を作り、集落内の熊野神社に奉納した後、「カミ」と「シモ」に設置する。「カミ」は県道と合流する三叉路で、「シモ」は隣の集落との境である。集落の出入り口に巨大なワラ蛇を掲げることで、災厄の侵入を防いでいる。須郷田集落では、お盆明けの日曜日に「鬼のしめ」と呼ばれるワラの飾りを日吉神社の鳥居や集落の境など4か所に掲げる。土場沢集落や五海保集落でも、8月前後にワラ蛇や鬼の形を模したものを掲げている。

災厄の侵入を防ぐために、神社や集落の境などにワラ蛇を掲げる習俗は、「辻切り」や「道切り」という名称で関東地方でも行われている。東由利地域では、辻切りの習俗と初午の時期における火伏の信仰とが習合したと考えられる。現在8月に実施する集落と2月に実施する集落があることは、類似する行事を半年ごとに繰り返すという年中行事の二重構造について考察する上でも意義を持つ。ワラ蛇を使用する習俗は、男鹿市、大仙市等でも行われているが、百万遍や綱引きなどの年中行事との関連で製作されていることから、東由利地域とは異なる。また、鬼の形を模したものは、東由利地域以外では確認できていない。

東由利のしめ張りは、行事の目的は共通するが、集落ごとに実施日や形態が異なっている。また、辻切りの要素や火伏の信仰を含み、まとまって継承されている地域は、県内では他にないことから貴重である。

参考

秋田県記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財「東由利のしめ張り」平成23年(2011)3月17日

参考文献

由利本荘市教育委員会『東由利のしめ張り』令和4年(2022)3月